

# 災害エスノグラフィーによる南阿蘇村の食を中心とする 支援事情調査

## Disaster Ethnography of Food Situation in Minamiaso

○守真弓<sup>1</sup>, 守茂昭<sup>2</sup>  
Mayumi MORI<sup>1</sup> and Shigeaki MORI<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 特定非営利活動法人高度情報通信都市・計画シンクタンク会議

Telecom-Society Corporations and Planners

<sup>2</sup> 一般財団法人都市防災研究所

Urban Disaster Research Institute

To utilize collected information on the food situation in disaster stricken district, survey by disaster ethnography was conducted on March 30, 2016. The survey respondents were four officials of Minamiaso village office, a leader of a private volunteer organization, a resident in Tateno area who worked at a souvenir shop of the Hotel Greenpia Minamiaso, and two hotel employees. Documentation was performed from the recorded contents. The 2016 Kumamoto Earthquake damaged a wide range of area in Kumamoto prefecture, and in Minamiaso, the traffic was cut off at places along a main road. Immediately after the earthquake, the village was temporarily isolated. The village officials purveyed food and supplied daily meals with the cooperation of the Self-Defence Forces in the evacuation centers. Further, the leader of the private volunteer organization, who entered Minamiaso immediately after the occurrence of the disaster, conducted eating support in this district.

**Keywords** : 2016 Kumamoto Earthquake, disaster ethnography, purvey, evacuation center, volunteer

### 1. はじめに

南阿蘇村における食支援事情の調査について報告する。

平成 28 年（2016 年）熊本地震では、2016 年 4 月 14 日に熊本市で最大震度 7（マグニチュード 6.5）<sup>1)</sup>、4 月 16 日には、最大震度 7（マグニチュード 7.3）の地震が発生した<sup>2)</sup>。南阿蘇村では 4 月 14 日の震度 5 弱（熊本県阿蘇）、4 月 16 日の震度 6 強（熊本県南阿蘇村）の地震により、主要道路である国道 57 号線が崩壊し、阿蘇大橋が崩壊し、土砂災害で通行止めとなった。県道熊本～高森線の俵山トンネル崩落、土砂災害のため通行止め、県道河陰～阿蘇線の土砂災害および道路面崩壊のため通行止めとなり<sup>3)</sup>、一時孤立状態に置かれた。

このように交通が破壊された被災地の被災直後の食料事情を探り、今後の防災や備蓄に活かしたいと考えた。

5 月 30 日に南阿蘇村を訪問し、ボランティア組織の代表者および、食事対応にあたった村役場の職員の協力を得ることができた。

被災者への食事提供については、被災直後は村役場および上記のボランティア組織が共同で行い、その後支援対象が分かれた。村役場は主として避難所での生活者および避難所へ食事を求めて来た人々に対して食支援を行い、ボランティア組織は在宅被災者を含む、避難所以外の場所にいる人々に対して食支援を行った。

さらにホテルグリーンピア南阿蘇でもインタビューを行った。売店で働いていた立野地区の住民の女性とフロントの男性である。ただし売店の女性の発言は店内で話を伺ったため録音は行えずノートに記録しているのみである。

7 月 28 日に再度南阿蘇村を訪問し、同じ対象者に面会して事実確認を行った結果を合わせて整理した。さらに、7 月 29 日にホテル管理者にインタビューを行った。

本稿で示す南阿蘇村の状況からは、行政およびボランティアによる食支援の可能性および課題、また行政・ボランティア間の支援の調整における課題について示唆が得られたと考えられる。

### 2. 方法

災害エスノグラフィー<sup>5)</sup>と呼ばれる方法に基づいて、分析レポートにまとめるため、インタビューを録音した。

#### 対象者

南阿蘇村役農政課 M 氏、K 氏、I 氏、A 氏、ボランティア組織のリーダー T 氏、ホテルグリーンピア南阿蘇の売店の女性、フロントの男性、およびホテル管理者の男性の協力を得ることができた。

#### 調査の実施

調査は 2016 年 5 月 30 日から 6 月 1 の 3 日間にかけて行なった。最初に、久木野中学校体育館で村役場農政課の職員に面会した。次にボランティア組織の本部となっていた喫茶店を訪問した。ホテルグリーンピア南阿蘇では売店の女性に店内で話を伺った。フロントの男性には都合の良い時間を教えていただき、フロントでインタビューに応じていただいた。2 度目は 7 月 28 日から 29 日の 2 日間で、同じ久木野中学校体育館およびボランティア組織本部の喫茶店を訪問した。また、ホテルグリーンピア南阿蘇の管理者の男性にはロビーでインタビューを行った。ホテル売店の女性を除く全員の発言は了解を得て録音した。

#### トランスクリプション

録音データは、逐語ベースでテキストに起こした。

ある程度読みやすくするため、テキストのうち、言いよみや、「ええ」などの感動詞の削除、意味が不明瞭な表現の補完を行なった。

### 3. 分類

各対象者のインタビューテキストを発言のまとまり（ブロック）ごとに区切り、フラグを付けて整理した。フラグは2段階とした。第1段階として災害食（被災生活）に関する一般的な調査項目に該当するようなフラグとして、インフラ、避難、備蓄、食事、調理とした。第2段階としては、被災時の食の入手に関する分類項目に該当するフラグとして調達、仕分け・搬送、ニーズとのマッチングとした。

南阿蘇村では、震災から約1週間停電していた。九州電力が電源車による給電を4月20日に開始している<sup>3)</sup>。この日から5月23日までの34日間（約1か月）が公的な炊出し時期である。公的な炊出しが終了して、一部を除き避難所が閉鎖となった。

以下は各テキストを段階ごとにまとめたものである。

表1 各テキストの段階別の要約

	南阿蘇村役場農政課M氏、K氏、I氏、A氏	ボランティア組織T氏	ホテルグリーンピア南阿蘇売店の女性(売店の女性)	ホテルグリーンピア南阿蘇フロントの男性(フロントの男性)	ホテルグリーンピア南阿蘇管理者の男性(管理者の男性)
4月14日～19日(停電)	対策本部設置。農政課は食事担当に。避難所に人が集まる。持ち寄り、農協、店舗の協力でのしぐ。	16日に熊本で本震、直後に南阿蘇支援を決める。おにぎり、パンの支援	自宅(立野区)は無事だが断水。ホテルの厚意で宿泊。停電で売店の肉がダメになってしまった。	自宅におり出動できず。ホテルでは関係者が泊まり込んだ。水源はある。調理はできなかったのは、	職員はそのまま滞在。宿泊客は朝食後帰る。食材あり。料理長がいて食事は普通にできた。消防と自衛隊に場所提供
4月20日～5月23日(炊出し)	自衛隊による炊出し支援に本化。資材、食材調達に苦労する。メニュー作成	避難所の外の支援に回る。	親戚の家に滞在。南阿蘇に戻る。ホテル滞在。	営業再開してから行政とボランティアが多く宿泊している。	電気が回復し早期から営業再開
5月24日～	一部を除き避難所閉鎖。		水道が回復せず自宅で生活できない。	村の負担で被災者16世帯が滞在。	7月は13世帯に減った。8月には10世帯に。

#### 4月14日～19日（1週間の停電期間）

##### 【南阿蘇村役場（農政課）】

4月14日の震災直後、村役場では夜中に課長クラスの会議が行われ、夜明けと同時に調査報告が始まった。14日から避難が始まっていたが、この時は「自主避難というかたちで食事は持ってこられた」（農政課M氏）。

16日の本震の後の対策本部では、再び課長クラスが集められ、各対応ごとに担当する班が作られた。「私が教育委員会で、農政課なんですけど。私たちのほうはもう物販を運ぶというかたちで、食事とかいろんな物資が入ってきた分を、何が足りませんよというような避難所に持っていく係というかたちでした。」（農政課M氏）

16日以降は正式な避難所として役場が対応することに決まり、避難者が集まった。「食事ですね。水も来ない、電気も来ないという状況で。」（農政課M氏）

村では災害に備えた食料をあまりしていなかったという。「一応、住民福祉課のほうで避難所の緊急対応ということで、長期保存の水とか、乾パンであるとか、そういうのは、どうでしょう、20食とか30食程度ですよ。その程度の避難所1カ所に対してそのくらい程度の備蓄しかなかったし。」（農政課K氏）

備蓄がわずかであったにも拘わらず農政課は食事対応を迫られた。M氏によると、「私がいた庁舎の避難所では、職員が余った米を持ってきたりとか。あと、お店も一部出してくれる部分もあったんで、そういったものを買出しに行ったりとか。」上述の住民福祉課の非常食に加え、「地元の婦人会さんとかです。地元でやっぱりその、家にあるだけの食事を持って来てくださ

ちゅうことで」食糧を集めた。

「水は、私がいた避難所は水源が近くなので水源とかから汲んだりとか。」（農政課K氏）

調理器具としては、プロパンで炊く器具を農協等に手配し配置した。こうして、ライフラインが完全に停止している時期をしのいだ。

##### 【ボランティア組織】

ボランティア組織のリーダーT氏は、防災士であり災害救援専門ボランティアコーディネーターである。阪神淡路大震災の被災者であり、以来、全国の被災地で活動して来た。震災後熊本市に駆けつけたT氏は16日の本震を体験し、ただちに南阿蘇村の支援を決意している。

「若いご夫婦が近所の人のをメモって。で、日田に買いものに行った。（中略）買い出しに行ったそうですよ。小国まで行ったと言ってましたから。小国まではあるんですわ。小国を出るともう全然なくなってしまふ。もう熊本県になったら全然駄目です。」

T氏の組織は、福岡の団体の協力を得ておにぎりを届けた。農免道路を使い、福岡から日田（大分県）を経由して阿蘇に入った。

「この阿蘇に入ってくる道路がすべて駄目になったんです。そうすると、もう日田を経由しないと入ってこれないですよ。だから、福岡から日田経由で行くと、だいたい軽いときで3時間半、荷物が重かったら、やっぱり4時間ぐらいかかる。それを毎日往復してましたからね。」

この時期の行政への食支援協力についてT氏は次のように述べている。

「朝8時に、おにぎりを8時までに集めるわけですよ。で、各お母さん方が120～130人集まったんですかね。そういう人たちが集会所とかそういう施設で調理の施設があるようなところで全部おにぎりをつくって、それを集結場所に持ってくるわけですよ。で、数を数えて。で、行政のMさんに「今日は何個行きます」と数を報告して、「じゃあ、今からおにぎり200、パン200は」と提供してくれたんで、それを持っていきますから」ということで、連絡して、僕は昼頃に入るんですよ。」

T氏は各地に協力団体があるため、大量の食支援が可能であった。「僕らが提供させてもらったのは、19日から、おにぎりが1000個。多い時は1500個ありましたね。1日。2個入りが1000。2個入りです。それからパンが200です。2個1パック。それが、200食です。19日から、それが毎日。南阿蘇の配送センター（道の駅「あそ望の里」の自衛隊の配送部隊）に届けたんですね。」

##### 【ホテルグリーンピア南阿蘇】

このホテルはもともと国の施設を村が買い取り、それを株式会社南阿蘇カントリークラブが引き継いだものである。この時に、不備があったという非常用発電施設をカットしてしまった（管理者の男性）。震災直後は停電となり、水をくみ上げるポンプも電動のため機能せず、ガス設備は電気弁を使用しているため機能しなかった。

「（宿泊客は）当日だけです。朝だけ。お帰りになるときは、ここで、パンとコーヒーだけ。飲物は。その分だけは何とかしたんです。ですから被災した当日は、もう、ごめんさいって、パンと、ドリンクで対応と。」

宿泊客が帰ると、従業員がそのまま滞在した。「調理場の者が交代で出てきたりとか。料理長がたまたま泊ってたので、料理長がずっとそのまま、足止めくらった

ような形で、家に帰れないと。食材とかそういうのは、全部あったものですから、被災者の方が食事されているような食事では、基本的になかったですね。うちのスタッフが食べたのは、通常のものに近いもの。」

売店の女性は立野地区の住民で、子供や孫は県外におり、独り暮らしである。隣近所の家屋が全壊したが自宅は無事であった。だが水道が使えないため生活できなくなった。この女性は一時期は県外の親戚の家に避難し、また南阿蘇へ戻った。「自宅にいるより安心だということで」（ホテルフロント男性）、ホテルの厚意で滞在することになった。

ホテルにはプロパンガスの設備があり、またこの地域には豊富な水源が多数あるため、汲みに行き、洗い物もすることができた。「水が無いというよりも、ポンプが止まっていたから出なかっただけで、水源は近くにありますから。」（ホテルフロント男性）

停電の間は営業できなかったが、消防と自衛隊に寝泊りする場所を無料提供した。「体育館とか、宴会場のスペースを消防と自衛隊の方がお使いになった。あちらは電気も水も必要ないぐらいに持ってこられますからね。」（ホテルフロント男性）

#### 4月20日～5月23日（炊出し）

##### 【ホテルグリーンピア南阿蘇】

4月20日には電気がほぼ復旧する。ホテルグリーンピア南阿蘇は4月23日から営業を再開した。「営業を再開してからは、行政の方とボランティアの方のお泊りは多くなりました。」（ホテルフロント男性）

上述のように、自衛隊はすでにホテルで寝泊りするスペースを確保していたが、20日からホテルの駐車場で炊出しを行い、本格的な食支援を開始した。

##### 【南阿蘇村役場（農政課）】

村役場では、炊出しの調理を自衛隊による支援に1本化することにした。「皆さんあのときは、一番ピークの時でだいたい3,000人ぐらいおられたんですよ。その避難所に、各会場に分かれて。（中略）私のほうは、結局避難所の方たちの人数の把握をしながら、朝・昼・晩の夕食の数を調整して自衛隊の方に教えて。」

資料で確認するとピークで2910食（朝）であった。

「うちがあくまでも避難所、プラス、駐車場とかにおられる方たち全員の食事を提供したちゅうかたちで。こちらら、全部、避難されて駐車場とかに寝泊りされている方たちの食事もお出しとります。」（農政課M氏）

村の人口は約11,000人（2016年8月現在11,287人）<sup>4)</sup>なので、1/4から1/3の人に食支援を行ったことになる。<調達>

食材は、まず最初に政府から2回4,500キロずつ米の支援があった。始めのうちは白飯と味噌汁や漬物だったが、「だんだん避難所の方も、おかげで1品欲しいなあ」（農政課M氏）となった。

農政課では調達のために苦心し、熊本市内の大手業者の協力を得た。自衛隊の炊出しは炊飯車による炊飯および、ボイル加熱なので、ボイルできる商品を取りに行った。保冷車やトラックも手配した。

主要道路の国道57号が使えず、通称「グリーンロード」という広域農道を使い熊本市へ出た。「1日1往復。半日かかります。益城町さんとか、かなり被災されて、けっこう凸凹の道を通ったり。通れない道があるので、最初に通った人が、このルートで行った方がいいよ、とい

うのがずっと、もう、毎日交代で買い出しに行ったんで。」（農政課A氏）

食材だけでなく、始めは使い捨て容器や箸を仕入れなければならなかった。また調理のために「味噌・しょうゆの調味料からすべて」（農政課K氏）購入した。「明日の昼飯がないとかいうのもあったんですよ。で、今日夜までに走らんとというような、もうギリギリの状態で綱渡りをしてたような感じ。」

#### <メニュー作り>

M氏によると「偏るわけにもいかないし、肉ばかりやらいけない」ので、おかげに苦労した。そこでメニューを作った。生野菜が不足したので朝は必ず野菜ジュースを付けた。

以下は実際の自衛隊炊出しメニューの一部である。

表2 自衛隊炊出しメニュー

月日	曜日	朝	昼	夜
4月20日	水	レトルト	おにぎり+みそ汁	おにぎり+すまし汁
4月21日	木	パン	おにぎり+オニオンスープ	おにぎり+スープ
4月22日	金	パン	おにぎり+大根と人参の味噌汁	おにぎり+スープ
4月23日	土	パン	おにぎり、さばみそ煮orオムレツ、すまし汁、なます+オレンジ、ミニトマト	豚丼、さつま芋味噌汁、ポテサラ
4月24日	日	パン+野菜ジュース	おにぎり+ビーフステーキ+コンソメスープ	おにぎり、オムレツ、ごぼうサラダ、あおさ味噌汁
4月25日	月	パン+野菜ジュース	おにぎり+カレー+とろろスープ	おにぎり+ハンバーグ+大根からいもニンジンスープ+マカロニサラダ
4月26日	火	パン+野菜ジュース	おにぎり+（ごぼう、里芋、こんにゃく）ケンちゃん汁+チキンステーキorハンバーグ	おにぎり+味噌汁+フランクフルト+ごぼうサラダ

日を迫うにつれ充実しているが、「それでも野菜不足」（農政課K氏）であった。この地域は夏秋地域なので、作付の前の時期で生野菜が手に入らなかった。

#### <要配慮者に関する課題>

M氏によると、おにぎりを柔らかくして欲しいという要望と、おにぎりではなく、タッパーに入れて欲しいという要望があったという。M氏は、高齢者のために柔らかいご飯の希望があったか、配送先で手を加えていた可能性があると考えている。

K氏によると、支援物資の中にレトルトカレーがあったが、子どもには辛く、「ちょっと甘口はないのか」という要望もあった。だが調整することはできなかった。M氏は、それが課題であるが、現実には、とても余裕がなく対応できなかったと述べている。

#### 【ボランティア組織】

T氏は、福岡のおにぎり隊によるおにぎり、およびパンを19日から5月23日まで届けたと述べているが、4月24日からは、おにぎりとの支援は行政への協力という形ではなく、避難所の外での支援へと変わっている。

T氏は、行政への協力が中止となった理由の1つとして、4月21日に南阿蘇中学校体育館において、ノロウイルス感染者2名が発生したことをあげている。公式発表では4月23日に緊急搬送17名、経過観察隔離8名、経過観察（車中）3名とされ<sup>3)</sup>、4月26日にはノロウイルス感染者は3名とされている<sup>6)</sup>。

「南阿蘇は、いわゆる行政側しか支給しないという方針を取ったから。24日ですね。ノロウイルスが発生して以来ですよ。僕は行政のMさんに、福岡から、おにぎり何個出ましたよと、報告して、でスタートして行ったの

ね。8時に、毎日。夕食に使いましょうということで。その足りないところをどうするか、というので、Mさんが、いろいろ骨を折られてね。うちが1500持って行った時は、少なくて済むじゃないですか。その調整はMさんがやっていた。ノロウイルスが出たから今回遮断しましたよね。食材やいろんなところで制限かけましたでしょう。」

T氏の組織は「行政ができない支援を僕らはやろうということで」老人ホームなどの高齢者に対する支援や農業支援なども始めた。

T氏は、「一番大変だったのは、家が助かってるが、ライフラインが途絶えたところの人たち」と述べている。ご飯だけをもらいに避難所には行き辛く、支援が受けられないからである。

「外の人たちのほうがもう困るとるわけですよ。それがなかなか、家壊れてないから避難所に行けないと。本当は行っていいんですよ。行ってご飯もらってもいいんですよ。ライフラインが一切止まってるんだから。(中略)それがおかしいと僕は言うんですけど。ライフラインが止まった時点で、避難所に生活する人も外にいる人も一緒なんです。阪神淡路のとき全部そうでしたから。そんなもん、分け隔てはできなかったですよ。」

T氏の組織は「そういう買い物に行けないようなお年寄りがたくさんいるところで、物資があったら同じように、避難所と同じように」支援を行ったと述べている。

「いかにニーズを早く決断して速く調達するかが勝負ですよ。西原村の老人ホームが食材が集まらなと。肉や魚類が全然調達できないと。(中略)すぐ福岡のほうから手配させて、肉屋さんが僕らの基地やったんで、そこですぐブロイラー、鶏肉を持って走って。(中略)すぐその日に福岡に飛んで。肉とかそういうものを全部用意して。翌日朝納めたんですよ。それぐらいのスパンでやらないと。いったん行政あげてやったら3日、4日、5日かかりますよ。そのときはもう調達できてる状態なんです。」

T氏の組織は農業支援も開始した。「東海大学の農学部があったんですよ。だけど、もう学生がすべていなくなっちゃうわけ。もう福岡とか熊本市の市内のほうと。で、学生が残らないんで。今までは、学生たちがこの地域の農家の方のお手伝いしてたんですよ。それがなくなったから困ってはるんですよ。困ってるんだけど、どういうふうにそれをやる。学校側に話しすれば今まで済んでたものが、どういうふうに、その。」

5月23日～(避難所の閉鎖)

【南阿蘇村役場(農政課)】

自衛隊の協力による炊出しは約1か月継続し約7万食が提供されたが、5月12日より、食支援は商工会に引き継がれ、弁当に切り替えられた。残った支援物資は商工会に渡され、弁当の食材として使用された。

5月22日を最後に、大津町の避難所等一部を除き、避難所は閉鎖となった。

【ホテルグリーンピア南阿蘇】

このホテルでは、みなし仮設住宅として、16世帯の被災者が滞在した(ホテル管理者男性)。滞在者の数はなかなか減らず、7月でも13世帯が残っていた。

#### 4. まとめと今後の課題

南阿蘇村の記録からは、行政による食支援の可能性と

限界の例が示されている。ホテルの活用や、農免道路を使用した食料調達は、他の地域でも探るべき可能性を示している。自衛隊のボイルによる炊出し協力を得たが、栄養が偏らないよう、また食事内容を豊かにするメニューの工夫は、災害時の食の問題のいくつかを解決する可能性を示している。しかしながら、2トントラックを運転して提供した食事は、ピーク時の約3000食という数字が支援の限界と考えられる。また、一斉炊出しの方式を取ったこともあり、高齢者や幼い子供等への配慮について認識しながらも、余裕がなく対応することは出来なかった。

南阿蘇村では、初期の混乱期に、T氏率いるボランティア組織の支援無しに食事対応することは難しかった。民間のボランティアによる食支援は、停電期間中は行政の食支援を支えていた。農政課が使用した道路とは異なるルートで調達を行い、県外に協力団体を持ち、上述のように、迅速に西原村の施設へ食料を届けるなどしている。初期の協力関係が継続していた場合のメリットは大きかったと考えられる。ノロウイルスによる感染が発生したことが全てのボランティアの食支援を断った主たる要因と考えられるが、T氏の組織が長年被災地支援活動をしてきた実績があったことや、行政との協力関係が無くなった後は避難所以外の施設や在宅被災者に対して食支援を行い、行政の食支援を補佐する形になっていることを考慮すると、一律にボランティアの食支援を中止することが適切であったとは考えにくい。

行政の食支援において、より有効にボランティアを活用することを検討するべきである。また、行政とボランティア間の協力関係をいかに調整するかが重要な課題であると考えられる。

謝辞

本調査は地域安全学会「災害時食料供給研究会」小委員会による被災地における実態調査の一部として行われたものである。

エスノグラフィーテキストの分類では、新潟大学の別府茂先生の分類項目を使わせていただいた。ここにお名前を記して感謝を申し上げる。

#### 参考文献

- 1) 気象庁ホームページ：平成28年報道発表資料。平成28年4月14日21時26分頃の熊本県熊本地方の地震について。14.04.2016。<http://www.jma.go.jp/jma/press/1604/14a/201604142330.html> Accessed 24.09.2016.
- 2) 気象庁ホームページ：平成28年報道発表資料。「平成28年(2016年)熊本地震」について(第7報)。14.04.2016。<http://www.jma.go.jp/jma/press/1604/16a/201604160330.html> Accessed 24.09.2016.
- 3) 南阿蘇村災害対策本部プレス発表：平成28年熊本地震による対応について4月23日13時現在。Accessed 04.23.2016.
- 4) 南阿蘇村ホームページ：住民福祉課。村の人口及び世帯数(2016年8月31日)  
<http://www.vill.minamiaso.lg.jp/soshiki/4/24jinnkou.html> Accessed 24.09.2016.
- 5) 林春男、田中聡、重川希志依ほか：防災の決め手「災害エスノグラフィー」—阪神・淡路大震災秘められた証言。NHK「阪神・淡路大震災秘められた決断」制作班。2009.
- 6) 南阿蘇村災害対策本部プレス発表：平成28年熊本地震による対応について4月26日20時現在。Accessed 04.23.2016.